

明星大学心理学会第6回大会記念講演抄録

知覚心理学の対象と方法論を再検討する¹

境 敦 史*

講演者は、2010年度の大学特別研究員として、イタリア共和国 Friuli Venezia Giulia 州のウディネ大学 (Università degli Studi di Udine) に赴き、ヨーロッパの実験現象学的アプローチの伝統に連なる知覚研究の重鎮である Giovanni Bruno Vicario 教授とともに研究を行った。この経験を踏まえ、知覚心理学とはどのような学問か、即ち、「知覚心理学では、どのような事柄を、どのようなやり方で扱うのか」論じたい。

1. 科学的思考は条件分析に基づく

例えば、「念力によって他者の行動を制御できる」という命題を検討する場合に、いかにも怪しい事柄だけを疑ってかかるのは、科学的とは言えない。もっともらしい事柄にも、疑わしい事柄にも、等しく批判的検討を加えなければならない。それは、「もっともらしい」とか「怪しい」という判断そのものが誤謬である可能性が排除できないからである。但し、その際、ただ真偽のみを問う形式での検討は生産的ではない。というのは、そのようなやり方では、「真偽が判明すると前もって判明している事柄」以外を扱えないからである(例えば、「2は奇数である」という命題の真偽は問えるが、「念力は存在する」という命題の真偽をいきなり問うことは困難であり、仮にそのような問いに対して何らかの多くの場合、直観的な結論が示されたとしても、その結論そのものが誤謬を孕んでいないという保証はない)。

以下の2つの条件を充たした事柄だけが、「科学的」であると認められる。即ち、(1)客観性があること(=他者と共有することが可能であること)という条件と、(2)再現性があること、即ち、「同じ条件を整えれば同じ現象が起きること」という条件である。後者は、「どのような条件の下であれば、その現象が生起するか」と言い換えられるから、これは、ある現象の生起条件だと言えるが、そのような生起条件は、条件分析と呼ばれる検討から明らかになる。

条件分析とは、ある現象を左右すると想定される複合的条件の効果を、一つずつ検討していく過程である。その際、想定される複数の独立変数のうち、ある変数のみの効果を、別の変数を一定に留めたまま検討する。

これによって、ある命題の真偽をいきなり問うのではなく、例えば、「どのような条件の下で“念力”と呼ばれる出来事が成立する確率が高いか」を問いながら、その条件を絞り込んでいくことが可能になる。条件分析は、科学的な探求においては、本質的な思考方法であり、心理学の全ての研究領域においても根本的に重要である。例えば、「心とは何か」をいきなり問うと、検証不可能な主観的主張が羅列されるだけだが、「いかなる条件の下で、“心”と呼ばれる事柄が成立するのか」を問うことは、検証可能な問題設定であるだけでなく、他者と共有され利用されるデータの蓄積にも繋がる(例えば、臨床の現場において「返事をしない人」に遭遇した時、いかなる条件の下では返事をし、いかなる条件の下では返事をしないか検討することが、鑑別診断に繋がる)。

2. 物理的世界のみを真と見なす考えから捉えた「知覚」

「錯覚」や「幾何学的錯視」は、知覚心理学のテーマとしてよく採り上げられる。「幾何学的錯視」の代表例としてしばしば引き合いに出されるのは、ミュラー・リヤー錯視である。水平線分を「主線」と呼ぶが、主線長が等しければ、外向図形の主線の方が内向図形の主線よりも長く見えることが知られている。このような錯視現象については、「人間は、物理的世界を正しく認識することはできない」とか、「脳が図形に騙されている」といった言説が一般に展開されるが、それらに通底しているのは、以下のような、互いに関連し合う考えである。

- (1) 物理的世界こそが、唯一の客観的で正しい世界であるから、世界を物理学的に捉える考え(物理学的世界観)こそが、唯一の正しい世界観である
- (2) 知覚は、物理的世界の写像としての心理的世界で

* 人文学部教授/2010年度大学特別研究員

¹ 本稿は、2012年2月4日に開催された明星大学心理学会第6回大会における記念講演の内容に加筆したものである。

ある

- (3) そのような写像は物理的世界を正確に反映しない
 (4) 知覚する主体は脳である

これらの考えを繋げば、「錯視とは、私たちが、唯一の客観的で正しい物理的世界を、そのまま正しく知覚できない現象であり、その原因は、知覚の主体たる脳が物理的世界に騙されていることにある」という、錯視への通俗的な理解が形成される。しかし、知覚をこのように「物理的世界に関する誤った認識」と捉えると、「知覚されるのはあくまでも仮の世界である」とか、「真の物理的世界と仮の知覚との不思議な食い違いがなければ、知覚の研究には着手できない」ということになってしまう。

3. 知覚以外の水準において知覚を語ることは、無意味である

しかし、上記(1)の物理学的な世界観は、多様な存在論のうちの一つに過ぎず、「唯一にして正しい」世界の捉え方ではない。「客観的な物理的世界」は、知覚される事実ではなく、概念ないし約束事である。むしろ、「世界が客観的であること」は、「共通の正しい物理的世界が存在すること」を反映しているのではなく、私たちが同じ地上環境を共有していることと同義である。

上記(2)のような、知覚を心理的・主観的世界と見なし、物理的世界の貧弱な再現と捉える考えは、デカルトの心物二元論に根ざしている。この考えはまた、「物質界は、知覚の性質を持たないが、知覚の原因である」とする「知覚の因果説」の別の姿でもある。この考えに従うと、私たちの周囲にある現実の環境は、(原子から成り絶対空間座標に位置づけられる)物理的世界と同一視され、「(物理的世界である)環境についての知覚は、その貧弱な写像にすぎない」ことになる。しかし、私たちは、この世界が原子から成ることを知覚しないし、私たちは絶対空間座標系の中で生きているとは知覚しない。

上記(3)の考えは、「私たちは、物理的世界について、正しく知覚できない」、即ち、「私たちの、正しい物理的世界を正しく知覚する能力には限界がある」という見解と同義である。しかし、「物理学的世界観では、私たちの知覚を的確に記述することができない」と考えれば、(3)の主張は、何の意味も持たない。

上記(4)のような考えは、生理現象の水準への知覚の還元である点で、「知覚の生理還元論」或いは「過程錯誤」(Vicario, 2003)と呼ばれる知覚研究上の誤謬に含まれる。知覚の主体を、「自己」という自律的行為の単位から、自己身体の一部であることが合理的にしか理解

できない「脳」へとすり替えることには、知覚そのものの研究に何ら資するところがない。つまり、「知覚がどのようなものであるか」について、私たちは私たち自身の知覚を根拠として、即ち「自己」の責任において語るが、自分が脳になったつもりで知覚を語ることは不可能であり、しかもそのように語ることに、知覚の研究の上で何の意味もないのである。

知覚とは、基本的に、「今ここにある環境の特徴(“対象”や事象)と自己の存在・状態とを、自分自身がじかに、知ること」である。従って、知覚は、「直接経験《direct experience》」とも呼ばれる。しかし私たちは、環境について知るとき、同時に、「環境について知りつつある自己の存在や状態」をも知る。例えば、“この部屋は暗い”と知覚すると同時に、“この部屋は暗いと知りつつある自分が、今ここにいる”とも知覚する。従って、知覚とは、環境《environment》と自己《self》との相互依存的な認識である。

4. 知覚の水準において知覚を語る方法

Vicario 教授は、知覚を、「物理の水準、神経の水準、心的水準から成る3水準の实在を貫く過程」と捉えた(Table 1)。即ち、知覚とは、3水準の最上位にある心的事実であり、それを扱うのが知覚の心理学である。その上で、知覚を物理の水準で語ること(刺激錯誤)や、(例えば、知覚の主体を脳に置く考えのように)知覚を神経の水準で語ること(過程錯誤)は、いずれも、「心理学としての知覚研究」にとって錯誤であって、唯一「観察者に記述を求めること」だけが知覚の諸事実を知覚の心理学の水準で記述する方法であるとしている(Vicario, 2003)。この考えに従えば、知覚者自身による「どのように知覚されるか」についての記述を離れた知覚の研究はあり得ない。

5. 知覚研究の進め方を巡る考察

ベルギーの知覚心理学者アルベール・ミショット(Albert Michotte, 1881-1965)は、実験現象学的手法を用いて、運動の視知覚を研究した。彼は、円盤法と呼ばれる機械的な呈示方法を用い、水平方向に移動する複数の対象を呈示して、観察者に記述を求めた。この

Table 1 知覚の3水準 (Vicario, 2003)

心的水準	知覚の諸事実	知覚の心理学
神経の水準	神経過程	知覚の生理学
物理の水準	物理的刺激	知覚の物理学

ような観察事態において、実験に慣れていない観察者に「どのように見えるか」を問うと、しばしば得られるのは、次のような記述である。

左から移動してきた四角が、画面のほぼ中央で静止していた別の四角に接触して静止した。次に、それまで静止していた四角が少し移動して、静止した。

この種の記述は、記述であることは確かであるが、「どのような事柄が見えたか」を述べるのではなく、物理的な視点から捉えた変化を逐次的に述べただけであるから、「知覚に関する記述」ではない。一方ミショットは、「最初に動いた矩形がぶつかったことが原因で、静止していた矩形が突き飛ばされる結果となった」と知覚されることを指摘し、これを追突印象(launching effect)と命名した。このことから、「客観的かつ中立的であることを旨とした、主に物理学の知識に基づく逐次的な記述」は、Vicarioの言う“知覚の心理学”(Table 1)の手段である「知覚そのものについての記述」とは異なることが明らかである。

また、記述のレベルという問題もある。黒い矩形と白い矩形がランダムに動き回る事態を観察して、ある初学の学生は、以下のようにその現象を記述した。

黒い四角と白い四角がそれぞれゆれながら少しずつ近づいて重なったり、遠ざかったりしているように見えた。

一方、同じ事象を観察して、ある知覚研究の専門家は、以下のように記述した。

白が黒にいきなり詰め寄ってちょっかいを出す。何か文句を言って手を出すか、意外に黒が強く、距離を置いて両者口喧嘩している。やがてまた白がちょこちょこ手を出すか、黒に一発返されるとすぐにひるみ、離れて悪口を言う。

初学者による記述は、確かに物理的特性にのみ着目しているわけではなく、動きの特徴を捉えようとしているが、専門家による記述ほどに動きの特徴を詳しく述べられていない。このように、知覚に関する記述を分析することが知覚研究において本質的に重要であるにもかかわらず、どのようにして知覚研究に資する現象記述を引き出すかについて、一定の標準的手法が存在するわけではない。

このことについて、Vicario教授は、ある日、次のように語られた。

統計学者ならば、40人の観察者のうち、30人が、ある現象が「見えない」と言ったら、「そんな現象は存在しない」と結論付ける。「75%の観察者には、見えない」のだから。しかし、我々のやり方は違う。まず観察者に、何も言わずに実物を見せ、その中で、自発的にその見え方について言及した観察者だけを対象にするのだ(2010年12月11日、ウディネ大学の研究室にて)。

統計学的に「正しい」研究の手順としては、多数の未経験の実験参加者に、ある見え方や感じ方が「何らかの基準を超えているか否か」のみを判断させるのが、実験参加者にとって容易に判断できる一般的な測定手法である。しかしながら、この手法では、測定している現象の諸相の分類には立ち入らない実験しかできない(即ち、そのような分類ができないばかりを集めている)。一方、観察者にその現象の分類ができるまで、実験者が観察者と関わりを持つことは、観察者に対する、ある種の説得であったり訓練となってしまう恐れがあり、「客観的科学」の手法としては望ましくないと批判され得る。この状況を打開するための方策としては、Vicario教授が提唱されている「知覚研究のプロトコル」(Table 2)が有効であろう。

6. 結語

- (1)知覚研究においては、「今ここで自分が知る事柄」全てを扱わねばならない(従って、「錯視だけ」を研究することなどない)のであり、探求の出発点は、「物理的世界と心理的世界のズレ」ではなく、「今ここで自分が知る事柄」全て、である。私たちは、「物理的世界を正確に認識できない」のではなく、「物理学的な記述では、知覚を的確に捉えることができない」のである。
- (2)実験現象学的な知覚研究では、「心的事実は生理的事実に還元できない」という認識論を採用している。従って、知覚の主体を脳に委ねたり、知覚を生理学の水準で説明しようとはしない。

Table 2 知覚研究のプロトコル (Vicario, 2008)

- [1]現象を観察して綿密に記述する
- [2]現象を特定する変数を探索的に操作し観察する
- [3]熟練した観察者との議論から、操作すべき現象的変数を決定する
- [4]先入観のない観察者に典型例を示し、自由記述を求める
- [5]記述の分析から重要語・頻出語の選定し、観察者に与える課題を決定する
- [6]実験計画を策定し、実験を実施し、結果を統計的に分析する
- [7]実験後の観察者からの聴取により、実験者が気づけなかった現象特徴を理解する

- (3)「知覚の、絶対的かつ純粹に客観的な研究方法」などない。研究者の知覚を(それを主観と呼ぶのなら、主観を)全て排除した研究など、実行不可能である。しかしこれは、「知覚心理学では個人の主観だけを重視する」と述べているのではない。実験現象学的な知覚研究が目指すのは、「知覚の、他者との共有」であり、そこから現象の構造や共通特徴を探求する。
- (4)知覚 (=現象=経験) を他者と共有するための手段は、「供覧《demonstration》により自己および他者の経験そのものに訴えること」以外にない。それを「知覚研究のプロトコル」に従って進めて行くことが、知覚研究の最も有効な方法である。

引用文献

- Vicario, G. B. (2003). *Prolegomena to the perceptual study of sounds*. In : D. Rocchesso, & F. Fontana (eds.), *The Sounding Object*. Mondo Estremo Publishing, pp. 17-31.
- Vicario, G. B. (2008). *Experimental phenomenology and the sciences of perception*. *Teorie & Modelli*, n.s., XIII, 2-3, pp. 17-45.

謝辞 私が大学特別研究員となることを学科を挙げてお認め頂き、私の不在に伴う諸事に様々なかたちで対処して下さいました心理学科同僚諸氏ならびに心理学科室スタッフ各位に、この場を借りて御礼申し上げます。